

1 学校教育目標

- 広い視野に立ち、深く考える人になろう。
- あたたかい思いやりを持ち、心にうるおいのある人になろう。
- 進んでものごとを行い、力いっぱい努力する人になろう。
- 健康なからだをつくり、明るい心を持った人になろう。

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	安心・安全な学校 誇れる学校
○児童・生徒像	自律（自己をコントロールする力）心もち、他者と協働（多様性を認め合い、自己の役割を果たそうと努力すること）できる生徒
○教師像	学び続ける教師 信頼される教師

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

○学校の現状

- (1) 落ち着いた学校生活環境の中で教育活動が行われ、生徒が学校行事や生徒会活動、委員会活動、部活動に熱心に取り組んでいる。
- (2) 基礎基本の学力定着を目指し、ICT機器の活用、朝学習、朝テスト、補充学習を実施している。
- (3) 教職員が熱心に教育活動に取り組んでいる。
- (4) 開かれた学校づくり協議会、PTA、おやじも会と協力連携した行事運営が行われている。地域行事への生徒・教員の参加も再開した。

○前年度の成果と課題

- (1) 生徒の学校生活アンケートで「学校に行くのは楽しい」が全学年平均 85.5%、「授業中は真剣に取り組んでいる」が全学年平均 87.3%であった。しかし一方で、「不得意なこと、苦手なことでも自ら進んで取り組もうとしている」「わからないところはそのままにせず、わかるまで努力をしている」に対する肯定的な意見は70%台であり、特に1年生の数値が低く、「努力」や「挑戦」することへの意欲を高める必要がある。
- (2) 学力向上の基本である、生活規律の徹底を図る必要がある。

4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R4	R5	R6	R7	R8
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	ICT機器やアプリケーションを活用した学力の向上、資質・能力の育成			○	○	
3	自律と協働を目指した生活規律の定着と特別支援教育の充実			○	○	

5 令和6年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)		実施結果 (通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
ICT 機器等を活用した授業実践		年度末学力調査正答率65%		3教科平均正答率 1年 58.9% 2年 58.6%		達成基準は下回ったが、目標数値より全て高い結果であった。		◎	
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象学年 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 新規	ICT 機器及び各種アプリケーションの活用	全学年 全教科	通年	(1)教育活動全般での ICT 機器の活用の推進 (2)Google Workspace for Education 等の有効活用	生徒授業アンケート 授業観察等	教員の活用に対する肯定的意見70%以上	9月に実施した授業アンケートでは、全学年 80~90%を超える肯定的な数値であった。	教科によって活用頻度に差があり、今後改善していく。	◎
2 新規	AI ドリルの有効活用	全学年 5教科	通年	(1)5教科において積極的に活用する。 (2)AI ドリル活用における評価方法を検証する。	授業観察等 Qubena マネージャーによる確認	MAU 率5教科平均50%以上	MAU 率は平均 50%を超えている。70~90%超である。	学校行事の有無により、活用頻度が下がる月がある。	◎
3 新規	足立スタンダードの実践	全学年 全教科	通年	全教科の授業において「足立スタンダード」の徹底を図る。	生徒授業アンケート 授業観察等	めあてとまとめ、主体的な学習に対する肯定的意見が平均80%以上	9月に実施した授業アンケートでは、めあて、まとめともに80~90%の達成率である。	今後の維持、継続させていく。	◎
4 継続	教員の授業力向上	全学年 全教科	通年	(1)授業力向上研修の実施 (2)評価評定に関する研修の実施等	生徒授業アンケート 授業観察 面談	わかりやすい授業であるの肯定的意見が平均70%以上	9月に実施した授業アンケートでは、肯定的な数値が80~90%超であった。	教員一人一人に授業改善目標をたてさせるとともに研修を充実させたい。	◎
5 新規	学習習慣の確立	全学年 5教科	通年	(1)金曜日テスト (2)放課後補充 (3)家庭学習ノート (4)各種コンテスト	区学力調査結果 各種コンテスト	通過率65%以上 合格率80%程度	計画していた取組は全て実施することができた。補充学習も定期的に実施した。	金曜テストやコンテストの結果による補充学習を粘り強く実施した。今後も継続していく。	○

重点的な取組事項－２		ICT 機器やアプリケーションを活用した学力の向上、資質・能力の育成			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
全教員が ICT 機器や Google Workspace for Education 等のアプリケーション活用した授業実践を行う。		生徒授業アンケートにおいて、「ICT 機器や様々な教材を活用して分かりやすい」の肯定的評価が平均 70%以上	GIGA スクール推進校・リーディング DX 連携協力校としての実践が日々の授業に活かされ、肯定的評価は 80～90%超である。	今年度の実践を維持継続していくための取り組みを行う。	◎
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
組織の再編成	ICT 活用に関する委員会を設置し、学校全体として組織的に活用促進を推進。教育活動全般において積極的に活用する。	(1) 生徒授業アンケート (2) 年度末学校評価 (3) 授業観察等	GIGA スクール推進校・リーディング DX 連携協力校として、GIGA スクール実現に向けて、ICT 推進委員会を設置した。研究実践におけるリーダーシップを発揮した。授業アンケートでも高評価を得た。	全校体制で取り組んできたことを次年度以降発展・継続させていく。	◎
GIGA スクール推進校としての実践	教員研修の充実	(1) Google 社との連携に基づく研修の実施 (2) 教員のスキルに応じた研修の実施 (3) 授業での ICT 活用の効果検証	学校 ICT 推進課、Google 社との連携に基づく研修を実施し、教員のスキルが向上した。全教科での活用が見られる。	十一中の教員が「学び続ける教師」であり続けたい。	◎
	一人一台端末の有効活用	(1) 教科・領域で、タブレットの積極的な活用を推進する。 (2) 年 2 回の公開授業に向けての研究を学校全体で実施 (3) 生徒授業アンケート (4) 年度末学校評価 (5) 授業観察等	5 月 30 日に特別の教科道徳で、11 月 21 日に総合的な学習の時間での公開授業を行った。公開授業に向けての実践研究が、教員のスキルアップにつながった。生徒授業アンケートの結果は前述の通りである。	各教科での効果的な活用方法を探っていきたい。	○

重点的な取組事項－3		自律と協働を目指した生活規律の定着と特別支援教育の充実			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
自己をコントロールする力を持ち、多様性を受け入れ、自らの役割を果たそうと努力する生徒の育成		学校生活アンケート 区学力調査生活アンケート 学校評価	各種調査による客観的データから生徒理解を深めることができた。学校評価等から苦手なことに挑戦することには課題が残る結果であった。	数値結果だけではなく、日々の生徒とのふれあいを大切にしていきたい。	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
Web-QU、NINO等の客観的データに基づく生徒理解	各種研修の実施と充実	(1)年2回Web-QU研修の実施 (2)NINOの取り組みと分析研修の実施 (3)生徒理解研修の実施	Web-QU、NINOの他、NRTを1年生で実施した。また、Web-QUは2回、NINOは1回、研修を行い、客観的な指標に基づく生徒理解に努めた。	次年度も継続し、生徒理解を深めていきたい。	◎
特別支援教育の充実	支援が必要な生徒を早期に見出し適切な支援につなげる。	(1)特別支援教育部会の定期的な開催 (2)巡回心理士と連携を図り、支援の必要な生徒を見出す。 (3)特別支援教室の環境整備を進める。	左記の項目は予定通り実施できた。上記のデータに基づく生徒理解・分析を加え、支援が必要な生徒を早期に見出し、適切な支援につなげていきたい。	巡回心理士以外の関係機関との連携も深めていきたい。	○
生活規律の徹底	コロナ禍での決まり等が学校生活の中に残っており、時程を含めた見直しを進める。	(1)時程の変更 (2)衣替えの撤廃 (3)生活指導部会の定期的な開催	左記の項目は予定通り実施した。衣替えの撤廃の他、生活のきまりを生徒会役員との話し合いをもち、改正することができた。	生徒会・各委員会の活動を活発にし、生徒が主体的に活動できるよう育成していく。	◎
不登校生徒への組織的な対応	教育相談部会を中心とした組織的な対応を進める。	(1)特別支援教育部会の中で、不登校対応中心の会を定期的に設定する。 (2)別室登校について再検討する。	不登校対応には医療機関等の関係機関との連携が不可欠である。学校だけでは解決できないケースが増加している。不登校対応は給食の喫食を含め、更なる検討が必要。	不登校の要因をより正確に探っていくために、関係機関との連携を深める。	○

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

今年度は、足立区 ICT 推進研究校・文科省リーディング DX 連携協力校としての取り組みが教育活動の中心となった。「先生も生徒も みんなでデジタルアップデート十一中」のスローガンのもと、全学年の教科・領域での一人一台端末の活用を研究した。2回の公開授業を通して、教員一人一人がデジタル活用のスキルを向上することができ、授業改善への意欲が高まった。次期学習指導要領を見据えた、生徒の主体的・協働的な学びの授業展開へと確実に進化した。次年度も継続進化させていきたい。

生徒理解については、日々の指導の中から感じることを大切にしながらも、客観的に分析できる指標を複数取り入れた。Web-QU、NINO（認知能力検査）は生徒理解を深め、支援の必要な生徒を早期に発見し、適切な支援のあり方を検討する上で大いに参考になった。今後は、NRT（標準学力検査）の導入も視野に入れ、より生徒理解を深めることができる手立てをさぐっていく。

コロナ禍での制限があった行事内容の見直しを全面的に行ない、運動会では学年種目や生徒会主催種目を取り入れ、学芸発表会では、Meet による配信ではなく、全校生徒が一同に会し、同じ空間で発表を楽しむことができた。こうした行事内容の見直しは、生徒に達成感や一体感、高揚感を感じさせることができ、意欲形成につながった。開かれた学校づくり協議会をはじめ、地域や保護者の皆様に参観していただき、生徒が活躍する姿を見ていただけたことは、地域や保護者との信頼関係を築く大きな要素となった。今後も維持していきたい。

いくつかの「アップデート」できた教育活動もあったが、一方で不登校生徒の増加は、本校のみならず、全国的にも看過できない状況にある。別室登校対応の「教室復帰」を目指すゴール設定については再考が必要であると感じている。「ぼんやりとした不安」が昼夜逆転等の生活習慣の乱れを引き起こし、登校意欲の減退につながっているケースも少ないとは言えない。外部機関との連携を含めた不登校対策が必要であると感じている。学校や教室に復帰することが最終的な目標であることには変わりはないが、学校以外の外部機関へ通うこともステップの一つとして大切にしていきたい。

学校教育は一つの変革期に差し掛かっていると言えるだろう。多様な価値観が生まれ、便利で快適な道具が生み出される世の中になっても、教育の本質的な目標は「人を育てる」ことであり、「粘り強くこつこつとあきらめないこと」が、全ての教育活動の原点であることを忘れずに、進んでいきたい。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

安定した雰囲気の中で日々の教育活動が行うことができたのは、保護者や地域の皆様が本校の教育活動に協力的であることに他ならない。温かく見守っていただいたことには感謝しかない。令和7年度も保護者・地域の皆様の協力のもと、今年度の研究成果を基に様々な教育活動を展開する予定である。

(3) その他（学校教育活動全般について）

今年度の客観的な数値データと、日々の学校生活で感じる生徒の変容を鑑み、令和6年度の学校経営方針に活かしていきたい。